

(8) 東海・四国沿岸のスルメイカ漁場の特性と群組成

山本浩一（静岡水試伊東分場）

東海・四国沿岸のスルメイカ漁場を整理すると一定の共通性がある。これらの漁場の共通性と群組成とについてまとめると、次のようである。

1. 東海・四国沿岸におけるスルメイカの漁場は、房総、伊豆、紀伊半島等の先端部である。そして黒潮分枝流の強くあたる所に夏漁の漁場が、その逆に、分枝流の直接あたらない所に冬漁の漁場が形成される（図1）。
2. 稚仔、幼イカ、未成体イカの出現状況から、夏漁を形成するスルメイカ群は、冬期に東海、四国沿岸に補給され、それぞれの沿岸で成長し、交接時期（外套長 18～22 cm）に集群したものである。
3. 冬漁を形成する群は、標識放流の結果等から、東北・道東海域からの南下回遊群である。
4. 夏漁を形成する群は地付生活群といえ、冬漁の群は日本沿岸を回遊し、それが生活の大部分と推定される回遊生活群といえよう。
5. 地付生活群は各沿岸地形に対応した結果であり、回遊生活群は水塊に対応した結果と考えられ、この2つの生活形はスルメイカの特徴である。
6. 軟体類の進化を考えると、このような2つの生活形は、沿岸から沖合へと、生活範囲の拡大に対応していると考えられる（表1）。

表1 軟体類の生活形

	Benthonic	Pelagic
GASTROPODA	○	
PELECYPODA	○	
CEPHALOPODA		
Sepiidae	○	○
Loliginidae	○	○
Onychoteuthidae		○
Todarodinae	○	○
Ommastrephinae		○
Thysanoteuthidae		○

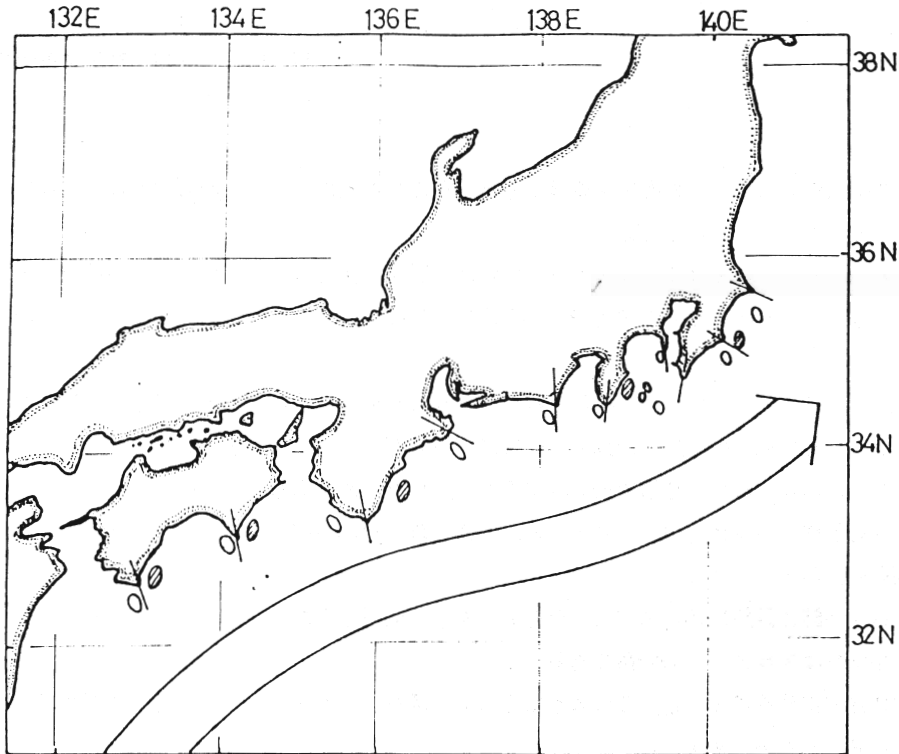


図1 東海・四国沿岸のスルメイカ漁場
(○夏季漁場, ⊗冬季漁場)

質 疑

奥谷 (科学博物館) 最初のスルメイカの稚仔から幼体にかけての群の成り立ちについては発見だろうと思いますが、それを最後のところで全軟体動物の系統に結びつけるのは問題があると思います。もし、その個体発生が系統発生を繰り返すということだと、底棲性の巻貝なり二枚貝が浮遊性の稚仔をもっている事の説明がつかないと思うんです。ですから、軟体動物全体ともってゆかないでむしろ頭足類の中で論じて頂いたら最も適切な解釈だろうと思うわけです。個人個人はいろんな説があるだろうと思いますが、私の感想を述べさせていただきました。